THE ROTARY CLUB OF KARIYA

Weekly

創立　1954年３月８日
承認　1954年３月30日

2014～2015年度　国際ロータリー　ゲイリーC.K.ホァン 会長テーマ
Light Up Rotary　ロータリーに輝きを

例会日時　毎週月曜日
12：30～13：30
例会場　刈谷市新栄町３の26
刈谷商工会議所内
事務所　TEL〈0566〉22-2111
FAX〈0566〉25-2111
メール　kariyarc@katch.ne.jp
ホームページ　http://www.kariya-rotary.com
会長　杉浦芳一
幹事　伊藤節夫
会報委員長　關　淳之

この会報は、地球環境保全に考慮し再生紙を使用しています。

第2884回例会プログラム

［当年度＝35回目；当月＝３週目］

2015年（平成27年）５月18日(月)

１．例　会……〈司会：プログラム委員会〉

12：28　１．チャイム
12：30　２．点　鐘……〈会　長〉
３．開会宣言
４．ロータリーソング斉唱
……それでこそロータリー
５．講師・ゲスト並びにビジター紹介
６．食　事

12：45　７．会長挨拶並びに会長報告
８．RYLAセミナー修了証授与
……村瀬（むらせ）　沙弥（さや）様、渡邉（わたなべ）　智文（ともふみ）様
９．新入会員挨拶……村上（むらかみ）　由洋（よしひろ）会員
10．退会会員挨拶……松井　秀仁（ひでひと）会員
11．幹事報告
12．出席報告
13．委員会報告
14．ニコニコボックス報告
15．次週並びに次々週のプログラムの予告
（５／25）……
クラブフォーラム（環境保全委員会）
講師　刈谷市経済環境部環境推進課
課長補佐　坂東　知道（ともみち）様
（紹介者　毛受　豊 会員）
※健康診断
（６／１）……
卓話「水素エネルギーの今後」
講師　東邦ガス株式会社東部支社刈谷営業所
チーフ　岩瀬　征夫（いくお）様
（紹介者　出口　達也 会員）

13：00　16．本日のプログラム
卓話「石田退三の三大恩人と矢田績」
講師　一般財団法人　石田退三記念財団
理事長　石田　泰正（やすまさ）様
（紹介者　鈴木文三郎 会員）

17．謝　辞
18．点　鐘……〈会　長〉
19．閉会宣言
13：30　20．散　会

ゲ　ス　ト

RYLAセミナー受講生　村瀬　沙弥 様
RYLAセミナー受講生　渡邉　智文 様
新入会員予定者　石川　友美 様
新入会員予定者　近藤　純子 様

出　　席

会員総数　93名　　出席免除　23名
出席義務者＋免除者の内例会出席者　83名
欠　席　12名　　出席率　87.95％
前々回（４／20）の修正出席率 100％

会　長　報　告

１）鈴木豊会員に３回目のマルチプル・ポールハリスフェローバッヂが届いています。廣根実会員、加藤真治会員に１回目のマルチプル・ポールハリスフェローバッヂが届いています。

2）第16回米山功労者の感謝状が加藤真治会員に届いています。

3） 5月13日に平成27年度刈谷市観光協会通常総会に出席して来ました。

4） 5月16日刈谷青年会議所創立55周年記念式典並びに謝恩会に伊藤幹事に出席してもらいました。

5） 5月17日に刈谷音楽協会定期総会に副会長の津田会員に代理出席してもらいました。

幹　事　報　告

1）本日、日本生命の村上由洋会員の入会により会員数93名になりました。村上会員は会場委員会への配属となります。

委 員 会 報 告

●国際奉仕委員会

1）さる4月25日にネパールで起きたマグニチュード7.8の地震について、RI会長、次期RI会長から当地区の近藤ガバナー、加藤ガバナーエレクトを通じて、ネパール地震災害支援基金のお願いがありました。会員各位のご理解、ご協力をお願い致します。（先週は、ネパールからの米山奨学生ウプレティ・レサム君に対するお見舞金をたくさん頂き、ありがとうございました。）

●職業奉仕委員会

1） 5月25日の例会前に健康診断を行います。

会 長 あ い さ つ

杉浦　芳一

本日は九州の玄関口にある小倉城と福岡城のお話です。

小倉城は関門（かんもん）海峡に面し海上交通の要衝で九州と本州をつなぐたいへん重要な位置にあります。

戦国時代には吉川元春、小早川隆景、黒田如水が拠点とした。

九州平定後は毛利勝信が6万石で小倉城へ入城した。その後1602年関ヶ原の戦いの後細川忠興（ただおき）が豊前30万石として今の城を本格的に築城しました。

細川氏は熊本転封まで小倉の街を城下町繁栄策として商人や職人を集めて商工業保護政策を実施、外国貿易も盛んにし祇園祭りも誕生させました。

その後細川家とは姻戚関係にある譜代大名の小笠原忠真（ただざね）が1632年に入城し徳川家光から九州譜代大名監視という特命を受けていました。以後、明治維新まで16万石で小笠原家が続きました。

福岡城は古代より外交上の要地で中国、朝鮮との交流の表玄関であった。

黒田如水が豊臣秀吉の軍師として九州平定の功により1587年豊前中津16万石を与えられ、同じとき筑前37万石を与えられた小早川隆景は福岡城の元となった名島城へ入城した。

秀吉の死後黒田如水、長政親子は徳川家康に近づき関ヶ原では東軍につき名島城へ入城し、新たに福崎の地に曽祖父黒田重政の備前国福岡の地名にちなみ福崎を福岡と改名し52万3000石の筑前をおさめる事になった。

黒田家も明治維新まで続き、現在の福岡を築きました。

RYLAセミナー修了証授与

渡邉　智文 様　村瀬　沙弥 様

新入会員あいさつ

氏　　名　村上　由洋
生 年 月 日　昭和40年4月30日
推　薦　者　盛田　豊一 会員
職 業 分 類　企業保険
事 業 所 名　日本生命保険相互会社
役　職　名　刈谷支社支社長
所属委員会　会場委員会

退会会員あいさつ

松井　秀仁 会員

卓　　話

「石田退三の三大恩人と矢田績」

一般財団法人　石田退三記念財団
理事長　石田　泰正 様

プロフィール

石田　泰正（いしだ　やすまさ）
一般財団法人石田退三記念財団　理事長
1975年　愛知県名古屋市に生まれる。
1997年　自動車部品メーカーに入社
2002年　貨物航空会社を創業
2007年　公益法人に入社
2010年　自動車部品メーカーに入社
2014年　現職に就任、現在に至る。

石田退三の三大恩人と矢田績

石田退三は明治21年（1888）～昭和54年（1979）に常滑市に生まれ、鈴渓義塾、滋賀県立第一中学校を卒業後、代用教員、洋家具店、呉服問屋を経て、大正４年（1915）に服部商店（現　興和）に入社して商売を学んだ。昭和2年（1927）豊田紡織に入社した後、50歳を過ぎて頭角をあらわし、戦後、トヨタ自動車工業（現　トヨタ自動車）、豊田自動織機製作所（現　豊田自動織機）の社長、会長を兼任してトヨタグループを再建し「トヨタの大番頭」、「トヨタ中興の祖」と称された。

私の就任している一般財団法人石田退三記念財団を紹介します。助成対象は児童生徒及び園児を対象とした教育等を振興する事業です。４種類の事業によって構成されています。図画工作は昭和35年（1960）に開始され刈谷市石田科学賞児童生徒創意工夫展（共催）刈谷市、刈谷市教育委員会、刈谷商工会議所他、豊田市小中学生創意工夫展（主催）豊田市教育員会、常滑市創意工夫展（主催）常滑市教育委員会、公益財団法人刈谷少年少女発明クラブへの活動助成。理科研究は昭和32年（1957）開始され刈谷市理科研究発表会（主催）刈谷市教育委員会他、豊田市科学研究発表会（主催）豊田市教育委員会他、常滑市わくわく科学講座（主催）常滑市教育委員会、刈谷市天文特別講座（共催）刈谷市（提携）名古屋大学への活動助成。社会科は石田退三記念事業の業績の紹介（伝記等）、関係文化財の保護、史料収集、調査研究。スポーツは、日中友好交流少年野球団（主催）刈谷市軟式野球連盟中国蘭州市人民政府、石田退三杯争奪刈谷市少年軟式野球選手権大会（主催）刈谷市軟式野球連盟中日ドラゴンズ OB 少年野球教室（提携）中日新聞社への助成をしています。

三大恩人と退三の関わりは、豊田佐吉翁から豊田綱領ものづくり、人づくり商売人の役割を、服部兼三郎服部商店（綿糸綿布問屋）から店憲「極めて大胆なると共に極めて小心なれ」商いの心得、手法のれんを守る覚悟を、服部商店への就職を世話をしてもらい、その後豊田紡織への転職を世話もらった児玉一造（三井物産　名古屋支店長から綿花部長に栄転して東洋綿花会長兼専務取締役には旧制中学進学（児玉家に寄宿））から江州人気質大胆果断かつ細心さを学び退三は、設備第一主義合理的金もうけ主義無借金主義金づくりガメツさ徹底主義を確立しました。

矢田績（やだ　せき）は万延元年（1860）に和歌山県で生まれ、慶応義塾を卒業後、23年間は新聞記者、明治28年（1895）に三井銀行に入行、明治38年（1905）～大正４年（1915）名古屋支店長後、監査役、東神倉庫（現三井倉庫）常務を経て大正11年（1922）に名古屋に帰還し、社会的事業（財団法人名古屋公衆図書館）を行いながら、橦木町倶楽部を設けて名古屋財界の重鎮として強い影響力を持ちました。矢田績は、豊田佐吉翁へは財政担当者の紹介や融資。服部兼三郎へは融資拡大。児玉一造へは事件の解決助言、協力を行いました。これにより、中部財界の商流が築かれました。

おわりの言葉（退三語録）

昔から伝えられてきたものを、単に古いからというだけで片づけるのは考えものだ。一見つまらなくみえても、その用い方によって、実にあじわいの深いものだ。「温故知新」という格言があるが、古いものの中によいものを見直し、活かしていきたいものである。石田退三「紙つぶて」中日新聞社（昭和44年９月８日）